

被爆二世の現状－被爆者の子どもとしての私たちの経験と考

門 更月

私は、長崎の被爆2世で、門 更月と申します。

私の母は14歳の時、長崎で原爆の光を見て、2日間ほど眼が見えなかったそうです。また黒い雨にも遭遇し、しばらくしてから歯ぐきから血が出たり、頭髪が抜けるなどの症状が現れ始め、下痢もしばらく続きました。母は現在91歳ですが、これまでに乳がんと皮膚がんを患っており、摘出手術を2回受けています。現在のところ転移はないと言われていますが、また別のがんが見つかってもおかしくないだろうと、私たち家族は覚悟しています。

私に関しては、がん等の被爆2世であるがゆえの疾患や症状は、現在まで現れてはいません。しかし、母が2度のがんを経験しており、被爆2世である私も、健康には常に不安を抱えながら生活しています。そのため、私は、毎年の健康診断を欠かすことはありません。

母は、結婚を考える頃周囲の人から「被爆者であることは言わない方がよい」と忠告されたそうです。しかし長崎には多くの被爆者がいたこともあり、私自身は、被爆者や被爆2世に対する差別を直接体験したことはありませんでした。

しかし、長崎県外では状況が違ったようです。私の叔母は、24歳のときに被爆しましたが、戦後は、結婚のため県外に移住しました。そこでも被爆者手帳を取得できるのですが、叔母は長い間被爆者手帳の申請を行いませんでした。その理由を尋ねたとき、叔母は「この地域で被爆者は診察できないと言われたことがある。長崎以外では原爆に対して大きな偏見がある。自分の子どもが結婚する際に母親が被爆者であることが不利になるかもしれない。子どもたちが結婚するまでは被爆者であることを公にしたくない」と答えました。

このように被爆者は差別や偏見にさらされてきました。また自分の子どもに放射能の影響があるかもしれないとずっと恐れてきました。

2世、3世と次の世代への影響を否定できない放射能を使用することは、絶対に許されないことです。だから核兵器と人類は共存できないと考えます。核兵器廃絶を強く訴えます。